

## 第6回 英国クラーク農場の経営

### 1 クラーク農場の概要

この7月に英国の農業環境政策を調査に行った際泊まった農家民宿のオーナーがジム・クラークさんである。正確には、農家民宿の方は奥様の管轄で、クラークさんはもっぱら農業経営担当だが・・・。

クラークさんの農場は、英国の南部、ロンドンと大学町で有名なオックスフォード市の中間あたりにあり、一帯は美しい田園が広がる。クラークさんはこの地で農業をやって4代目、年金を受領する年齢となり、経営の過半はすでに隣接した家に住む息子のジェミーさんに譲っている。英国南部は穀物主体の経営が多いが、クラーク農場も同様に、自作地400ha、借地100haの経営の主体は小麦、大麦であり、輪作作物として菜の花や空豆を作っている。日本の農業経営からみると500haという経営規模はとてつもなく大きく感じるが、英国南部地帯の穀物経営の規模は労働者1人当たり200～300haという感じである。クラークさん父子とこの農場で働いて55年という常雇の男性1人による穀物専業経営としては普通のサイズという所であろうか。

穀物の他に、90頭の肉用牛、500頭の羊という畜産経営も併せて行っている。そのため、サイレージ用の飼料用トウモロコシも作っている。

宿泊客である私たちが農業関連の調査に来たと知って、クラークさんは私たちが自分の農場見学に連れて行ってくれた。4輪駆動の大きな車の荷台に乗り英国の7月のさわやかな風に吹かれての農場見学は、本当に気持ち良かった。



自分の農地を案内するクラークさん

まず連れていかれたのは、肉用牛の放牧地。そこで自慢の雄牛を見せていただいた。

90頭の牛から毎年85頭の子牛が産まれるそうだ。

また、収穫前の小麦畑では、生長コントロールのための収穫前ラウンドアップ散布についての説明を聞いた。さらに、クラーク農場は環境管理制度に参加しているおり、その制度に基づいて設置している緩衝帯などを見せていただいた。これについては、後で詳しく紹介したい。



最後に借地で行っている羊の放牧地をまわった。この農地(草地)約 100ha はロンドンで金融業に携わっている人が所有しているが、生物生息地保護の観点から耕作が禁止されており、羊を飼っているそうだ。私たちが車で草地に乗り入れると、100haの草地に広がっている500頭の羊が一斉に走り出す。カウボーイになった気分である。この借地は少し離れた場所にあるので、わざわざ連れて行ってもらって申し訳ない、と言ったら、「クロス・コンプライアンスで1日1度は見に行かなくてはならないから、ちょうどいいんだ」とのこと。

EUからの補助金である単一支払いは、どの農家にとっても重要な収入源だが、それを受けるにはクロス・コンプライアンスと呼ばれる一連の農業管理を行わなければならない。これには、農作業の記帳、生け垣の保護などの環境管理、家畜への耳タグの装着などの家畜の健康管理、動物愛護のための事項などが含まれる。1日1回この草地を見回り、死んだ羊がないか、病気の発生はないかなどを確認するのは、クロス・コンプライアンスの要求事項の1つであり、単一支払いを受ける条件なのである。



## 2 クラーク農場における環境管理事業の取り組み

クラークさんは、環境保全的な農業活動に体して助成される環境管理制度のうち、一般的な取り組みを行う「一般事業」に参加している。一般事業では、あらかじめ提示されている様々な環境保全的取り組みを組み合わせ、1haあたり30ポイント分の活動をすれば、1haあたり年額30ポンドが支払われるというものである。クラーク農場は、この一般事業によって年間約90万円を得ているとのことだった。

クラーク農場における一般事業の取り組みの1つは、水源に流入する窒素分を押さえるために、水流に沿った耕地に緩衝帯を設け、そこに肥料吸収の大きい牧草を植えていることである。家畜糞尿や窒素肥料など農業に由来する硝酸態窒素による河川や地下水汚染は、農業による環境汚染の代表例である。クラーク農場を流れる小川は、ロンドンを流れるテムズ川につながっており、一般事業への参加を通じ、この水流の水質改善に貢献しているわけである。

また、生け垣の中心から4mまでの部分を緩衝帯にし、そこでは農薬や化学肥料を散布せず、鳥や昆虫の餌となる蜜や花粉、あるいは種子や実を豊富に提供する植物の種を撒いている。

このような環境管理事業を実施する際には、穀物の販売や資材調達で取引してい

る商社から、実施する事業の選択や緩衝帯に用いる種子などについてアドバイス(有料)を受けている。英国の農業者は、さまざまな情報を購入し、最適な経営を行う努力をしているのである。



水路(左側木立の中)に沿って飼料作物の緩衝帯を設けている。



生け垣に沿って設けられた4m 幅の緩衝帯。野草の花の種を撒いてある。

### 3 クラーク農場の経営多角化

クラーク農場は、年間の売り上げが約 4500 万円という農業経営の傍ら、ロンドンから

車で 30 分程度という地の利を活かし、古い農業用の建物や倉庫を改造して住宅にし、銀行家、医者、弁護士といった裕福な層に販売したり貸したりしている。

英国人はとりわけ自然の中で暮らすことを好み、また、古い建物が好きである。都市部の高層アパートは人気がないし、英国人の多くは緑の少ない都心には住みたがらない。少し余裕が出れば郊外の庭付き一戸建て、もっと裕福になれば田舎の古い建物（設備はもちろん近代的に改築してある）などに住み、休日は庭をいじり、周辺を散歩し、あるいは乗馬をし・・・特に気候の良い南部の田園地帯は人気があり、住居の価格が高く、結果として若者が農村に住みたくても住めないという社会問題まで引き起こしている。

また、クラークさんは、農機具倉庫の一部を事務所に改築し、中小企業に貸し出すビジネスも始めると言っていた。インターネットが発達し、都市にオフィスを構えなくても良くなった時代のなせる技であろう。

これらの所有地を活用した事業をクラークさんは「経営の多角化」と呼んでいたが、このような農業での経営多角化は、英国の農業政策の中でも奨励されている。

一方、民宿経営の方は奥様の趣味だそうである。民宿用の3つの部屋と独立したロジ1つは素敵な家具や置物で飾られ、朝食には自家製の小麦を自ら焼いたパンが出される。また奥様はガーデニングでも有名だそうで、民宿の横に広がる庭はテレビに放映されたこともあり、「庭の美しい農家民宿」という冊子にも掲載されている。

英国では農村にこそ滞在すべき、とはよく聞くが、その良さを満喫できたクラーク夫妻の農家民宿であった。





農家民宿と、自慢の庭に立つクラーク夫人。